



露天風呂にでる
幽霊

おっぱい
大きい俺
エッチ



祭りで羽目を外すと、興奮しすぎて肉欲が湧いてやまない。

が、祭りの日は女を抱くことを禁止されている。

昔、荒ぶるまま乱交したことで、村が滅びかけたことがあるから。

というわけで、以降は男の慰め役が用意されることに。

よそ者の若い男に、暴れ馬のような我が息子を慰めてもらうのだ。

性を扱くこと以上をしてもらっていいかは、慰め役の若者次第。

といっても、最終的にはみんな同じ選択をするのだが。

かなり報酬を弾むから、男との性体験がない若者も応募してくる。

今回、選ばれたのは、パチモンの高級時計をして耳にピアスをしたチャライ子で「おっさんたちのちんこをしこしこするだけで大金なんて最高ー

♥「と舐めた態度を。

まあ、そんな軽口を叩けるのははじめだけ。

次々とやってくる村の男たちの性器をにぎっているうちに、自ら着物を乱して足を開き、もどかしそうに腰を揺らして、勃起したのからお漏らしをだらだら。

村の男たちは同意なしに触ることはできないが、慰め役が自ら慰めるのはいい。

とあって、たいてい途中から慰め役は自慰をするのだが、彼は強情。

精液をぶっかけられて「はああ・♥」と肩を震わせながらも、乳首をいじったり、性器をしこつたり、尻の奥に指をいれようとしなない。

「くうう・♥そ、そんな目でえ、見るなよつ、おっさんう♥ふぐうう♥
精液、ぶっかえられる、野郎にい、なんで、そんな、興奮つ・♥ああつ



なんやかんやあって乙女ゲームの世界に転生した俺は、メインキャラの侯爵令息、その叔父となった。

侯爵令息は16才、俺は前世と同じ27才。

十才以上、年下なれど、甥っ子のケ빈は大人顔負けにのしっかり者で、気高く凜々しい。

幼いころに両親を亡くし、今は叔父と暮らしているのだが、まったく手がかからないし、なんなら転生したばかりでおぼつかない俺を、なにかと助けてくれるし。

「両親を亡くしても立派に育って・・・」とまわりでは評判なれど、ケ빈はひそかに野望を抱いている。

両親の仇をとりたいと。

ケビンの家は代々、王家に忠臣として仕え、まわりからは重鎮扱いされていたのを、嫉妬した他家が貶めてその地位を略奪したのだ。

陰謀のせいで両親が処刑された恨みを晴らすため、表向きはいい子のふりをしてながら、虎視眈々と復讐の準備をしているよう。

俺もできるだけ助力したいが、一族の中の恥ずべき存在、独身者でふらふらする道楽者とあって、ほとんど手を貸せることがない。
できることは一つだけ。

夜に寝室で寝ていると、弱々しい息づかいが聞こえ、腰が熱くむずむずし、目を開けると、赤ら顔で瞳を濡らすケビンが。

「お、おじさんっ♥おじさあ・♥」と寝間着を乱し、覗かせる下着の膨らみを、俺のもっこりに擦りつけている。

これが初めてのことでないから俺は驚かない。

復讐のため孤独に戦っている幼い彼は、ときにひどく心細く不安になり、居ても立ってもいられなくなるのだろう、こうしてたまに甘えてくるのだ。

ふだんは俺を巻きこむまいと、己を律している健気で幼気なケビンが愛しく、口づけをしてやり、寝間着の裾に手をさし入れ乳首を指で撫でてやる。舌を吸って、乳首をかるくつねって、腰を揺らして濡れた股から水音を鳴らせば「んふっ♥ふうう♥んんんっ♥」とあっという間に射精。

「んああっ・・・♥おじさああ・・・♥」と倒れて抱きついてきたのを、赤子をあやすように、しばし背中を撫でてから両手で尻の割れ目を広げて指を奥へと。

ケビンが好きなどころを指で擦ってやり、たまにくぱくぱっ♥広げると「やっ、やああ♥おじさあっ、そんな、広げなあでっ♥」と恥じらいながらも、乳首や性器を擦りつけてくる。



俺のおっぱいが大きくなったのは中学生のころから。

鍛えたわけでない、太ったわけでもないのが、朝、起きたら急に口カップ。男の胸が大きいとなると、ただでさえいじめの対象になるところ、猫の獣人は人間の憂さ晴らしの標的になりやすいから、なおのこと厄介。

そりゃあ口カップになって男子どもに弄ばれたし、女子からは嫌悪されたし、人間の変態どもに狙われたし。

助けてくれる猫の獣人や人間がいたから、なんとか苦難を乗り越えられたものを、大学生になったら、なんと借金取りにおっぱいを差しだすことに。友人の保証人になったら、逃げられてしまい「ええ体しとるやん兄ちゃん♥抱かせてくれたら、逃げたやつ捕まえるまで、すこし猶予与えるけど？」と借金取りのおっさんに脅されて、しかたなくだ。

おっさんとホテルに行くも「俺、挿入だけしたいから、準備よろしく♥」
といわれて風呂で一人で準備。

真っ裸でベッドに寝ているおっさんに跨がり、初体験にしてどうにかこう
にか、自称「暴れん坊將軍」の性器を飲みこんで腰を上下。

この難儀な体つきのせいで、俺はまだ童貞の処女で、性的なことには疎い
から、おっさんの性器を啜えても痛いし不快だし「早く、終われ！」と胸
の内で願って、いやいや奉仕を。

相手は「おおっ♥おおっ♥男のおっぱいぷるんぷるん、やばいなあっ♥」
とご満悦そうだったが、途中で「なあ、自分で揉んでーや♥」と要求。

しかたなく従うも乳首に触れたとたん「あっ♥あっ♥あああ♥ふあああっ
♥♥」としょんぼりしていた性器を奮い立たせ、一気に射精。

いやいや、乳首の感度がこないなんて知らない。

